

# ひとりごと二題

## 島田真一

### 一、ゴザの話

敗戦の一年前、小倭（シヨウワ）一八年の末ごろ、時の東条首相と秘書官に宛て、無署名で敗戦の必至、早期講和を勧告、まもなく二等兵として応召、五月石垣島に向った。

ワイの予報は一日だけ遅れた。ヒットラー、ムッソリーニ、ヒロヒトという天下の三賊をはじめ、ルーズベルトもスターリンも蒋介石も一日も早く死ねばよい、と兵隊にいた時、（意久地のない話だが）呪殺の祈願をかけたが、その中の一人は未だに生き残っていて、オイラの祈願も余り靈験イヤチコ・アラタカではない。

ワイの予報は必ず当るサ、との信念を持っていたが、どうやら怪しくなってきた。敗戦後、やかましいあのバチンコなぞ半年か一年でつぶれるサと推測していたが、まだ続いて何兆円産業かになっとる。何ちゆうこつじや。

白黒のテレビが出はじめの頃、六万円とか八万円とか言っていたから、旅館とか病院とか、料理屋、散髪屋、パーマ屋。周旋屋とか、それに似た議員あたりは客寄せに買うだろうが、高額所得者以外には普及しまいと考へていたが、この方も見事にはずれた。ウーン。

テレビの娯楽番組、民放のクイズ番組なども、人間の思考、意識をマヒさせる点ではバチンコと似ている。メモエの懐勘定から推定するので、自動車に至ってはテレビの十分の一、イヤ二〇分の一位しか普及しまいと予想していたが、テンカの形勢ごとく我に非。狭いやポネシア列島中、車洪水。余波をうけて物価は上り放題。

考えてみれば、戦後だけでも三〇余年。ワイのような自転車常用者は天下の大道を、小さくなって狭い端っこを通らねばならぬ。何の罪トガ、因業ぞや。おまけに排ガス、騒音、危険の出しっ放し。この物理的、肉体的、精神上的の損害たるや、今の公害補償基準でいえば一日八千円か一万円位に当るぜ。わかるか。二〇何才の時から右足裏に底豆（鶏眼）が三つ、左足に二つあって、兵隊の時手術をしたが再生、片輪になるほど切取らねば駄目らしいので、一キロ以上の歩行が困難、何分間かじっと立っていることがすこぶる困難なワイは、交叉点でいつ

まで経っても青信号が出ないと、もち前のカンシヤクも手伝ってイライラする。

お前ら、車を飛ばしたけりゃ、一台当り、数百万円を支払って交叉点毎に地下トンネルを掘りやがれ。その上に車一台当り、一時間一〇万円位の迷惑料をメーカーと共同して払いやがれ。消防車、救急車だけは許してやる。トラック、病院の車、バスなどは安くしてやろう。

朕思うに(チンは中国古代の木造船のトモにある部品の名。あってもなくてもよいものの意からテンシの自称、謙称に用い、古代には一般人も用いた)徒歩、自転車などの通行人はメイメイ、ゴザ(ムシロ)か、天幕、ビニール布を用意して、赤信号が出たらやおらムシロを敷きゴロリと手枕で横になるがよい。何を急ごうぞ。「青」が出てからゆるゆる立上り、ムシロのチリを払って荷物をまとめ―それが巾六米、長さ六米、二、三〇人も続いているとやがて「赤」になるから、ヤレヤレとまたゴザムシロを敷いて昼寝。そうこうするうちに、後の方は三三百台の車が立往生。一つの市で先ず五六百人も動員できたら半日以上車をせき止めるのは雑作ないぜ。ゴザの話というのはこれだけにしとく。

徹底的に車嫌いの人間が、同一時刻に同じ方向へ歩か

ねばならぬという難かしさがあるが、先ず三三十人からはじめるとよい。

## 二、石の話

中学ボーズのとき、カゴ島本線木葉駅まで約一里の道を毎日往復した。家から一キロほどの間は、田んぼの畦道に近いもので、道巾は一尺(三〇センチ)そこら。四月から夏にかけては、道の両側のチガヤ、雑草が生い茂って道をうすめ、それを踏みわけて歩かねばならぬ。蛇が出そうでこわい。膝から下は露でじっとりとなる。時たま馬や牛の飼料にその草が刈取られるが、半月余りすると元の姿になる。アノ忘れ難い印象は、梅雨明けの頃だったろうか。初秋にもあったように思う。草に結んだ朝露が、朝の太陽光線をうけて青、紫、緑、ダイダイ赤、白など七彩に輝やくのである。何とも言えず清らかで美しい。とても宝石ぐらいの比ではなく、心がこもって美しく、清らかである。その天然の宝石より美しいものを足で踏みしだき乍ら歩くのである。

一四五才の時、世の中に宝石なんか高価なものを求めるヤツは、馬鹿だ、と考えるようになった。

然し、少年の時、何年か続いてあのような色彩の朝露

を見た記憶は他に思い浮かばない。道いっぱい茂った朝露を、真正面から踏みしだかねば、そのような角度でなければ、あんな燦然たる光り方はしないのかもしれない。太陽光線の角度、時刻、気温などが微妙な影響を及ぼすのであろう。その田舎道でさえ、すでに中学ボーズの頃に道巾が広げられ、五六年前には舗装されてしまった。

高価な宝石、書画骨とう、茶器陶器の類は、その高価ゆえに軽べつするワイの心情、偏見は（他にも二三の来因があるが）幼少の時に発して今に変わらない。

児玉ヨシオが戦争中にかすめた何升かの宝石が、鳩山一郎に渡され、それが自由党創設の資金となった。また CIA（米国）のカネが、保守党の選挙づくり動いていることを知ったとき、もともと保守党の金権と暴力体質については熟知していたつもりだが、それらをバクロ発表することも忘れた日本のマスコミ、漠然と支持する国民層までも含めて、どうにもやり場がない憤まん、吐き出したいような侮べつの感情がうずまくのをどうすることもできない。

戦前でも女郎屋の親方、暴力団とつながりがある土建屋、その他の有象無象が県会議員となり、それらを地盤

にした代議士が、巾をきかせていたのであってニホンの政治とは娼婦たちの陰部（メメジョ）の汁を吸って、それに養われて生きながらえていた、と言っても過言ではない。はらわたが煮えくり返るぜ。

世の中に何が愚劣といっても、戦前のニホン軍部からい低脳、野蠻、愚劣、品性下劣なものは無かった。その唯我独尊、アジア蔑視の皇国史観を支えてきた文部省、教員、ジャーナリスト、それをよい事として利潤を貧乏った企業、商社の罪も軽くはない。

地球上の人類全体と生物の大部分を八十回とか百回とか殺せる能力をもった米ソを初めとする水爆の存在。そういう水爆や原子力を維持発展させることによってしか存立することができない既存の「国家」という存在。

現代という曲り角は、もはや既存の考へ方、認識ではどうにもならないことを、かなりハッキリと感じ始めている。個人の慾望、エゴイズムを満足させることが、資本主義の上昇期には、さしたる影響なしに当然とされたが、今や個人の自立、相互扶助という何十万年かの人類の体験を主軸に考へていかねば、エネルギー資源、公害食糧、人口等の具体的な問題で行きづまることが自覚されはじめた。

先ず突破口をあらゆる方面から作らねばならぬ。あらゆる「差別」の根源、頂点をなすテンノー(制)への攻撃もその一つであろう。アジア幾十億の民衆を数十年にわたって戦禍におとしられ、その生命、血涙、肉体に拭うべからざる傷痕を与え、戦後、テンとして恥じる気配もないテンノーの如きは、曾って政治犯や朝鮮人などが多年拷問で苦しめられたような方法を用いて、アジア民衆の復しゆうを受けるべきである。

それが困難を伴うならば、先ずニホン列島中のあらゆる公衆便所、デパート、スーパー、駅、病院、旅館、飲み屋等の便所にテンノーの戦争責任追及についての個人の見解、主張を書き述べるという方法もある。小型七センチ角ぐらいの紙にトーション又はタイプ印刷したものをはりつけるのも手ツとり早いだろう。印刷面の上にピニール液をぬれば、何年間も新しいし、強固な接着剤を用いて容易にはがされない工夫も必要であろう。

テンノー制のような臭いものに対しては、便所という臭い所から臭声を発するのも又止むを得ないであろう。東京「詩のベ平連」、札幌「はんげき」、名古屋「人間改造」(松井不朽)、熊本県荒尾の「遺言」や、破防法研究会、奥崎謙三、富村順一氏あたりは、ミニコミや

著書で既に実行に移っているし、同種のミニコミ類も他に沢山あるはずである。

☆

今から一五、六年前、この古い借家を修理する必要があった。家の近くの白川端の砂利商から、何度か砂と石を買った。顔なじみになると、緑川石の見事なのが山積みされていくのが目に入り、一〇センチから四、五〇センチのものを、形と色の良いものだけ選りどって分けてくれた。リヤカーに一台分買って、運ばんまでしてもらって、五、六百円であった。その川石も河川の砂利採取が禁止になって七、八年にもなり、今では手に入らない。狭い庭だが、苔のついた軽石もあり、友人が送ってくれた那智黒もあり、この家に残っていた幾つかの石臼もあって、高価な石を買う気はさらに起らない。佐渡の赤石、岐阜の菊花石など一〇万円級の見事な石も展覧会などで見て、愛情をこめて撫でてきたので思い残すことはない。私の意識の世界では、少年の時に見た朝露をはじめ、すべての美しいもの、香くわしいものが残って存在している。

檜、ナラ、山桜、竹など大方は山から移し植えた木々ばかりだが、毎年新緑を守るために数百匹の虫を殺さね

ばならぬのは悲しい。生命を扱う医者、結核菌でもチフス菌でも多細胞の人間でも「生命」である点ではチフトモ変りはないと言う。

野菜もパンも米麦も、魚も肉も明治生れのワイには想像もつかないほどの物価騰貴、日常生活そのものが詐偽の世の中である。数年も前から山の木の葉、木材などが澱粉化できないかと考へている。太陽光線と水で光合成化学工業が営まれている以上、不可能ではないだろう。肉も魚も若い頃の三分の一位しか欲しくなくなった。

七〇才を過ぎたら、山から拾ってきた木の実、ヤサイ

### 委託販売の助っ人を!!

△直接行動Vは、ほとんど手渡しと郵送しかなく、WRI事務所と直接関係がある方以外には、届ける方法がありません。そこをお願い、あなたの周辺の本屋さんその他で、店頭にならべて売ってくださるところをつくって下さいませんか。

委託は三部から十部以内。定価を三百円とし三割引きで納入、清算は次号発行時(約三ヶ月後)までという条件。その「取次ぎ納本、清算」までの世話を各地でして下さる助っ人を求めます。事務所(水田)まで連絡下さい。

の種などを主食に木食行をしてみたいと念じている。他は水と野菜、黒砂糖など少しあれば一年位生きられよう。郷里の山に四畳半ほどの穴を掘り、セメントで固め、深さ五尺の穴の上に三、四尺の高さの屋根とガラス窓をつければ、人一人は住めるはずである。かつて月山、湯殿山などで飢民を救うために、土中入定した僧たちにならって、心優しい人達、つまりアナキストを思いうかべ、権力者、つまりテンノーとか、それに類する多くの支配者たち例へばロッキードに連なる一連の非人間―を呪いつゝ死ぬことができれば、ワイがこの世に思い残すことはない。(一九七六・四・三〇)

附記。「遺言」はB5判一八頁。熊本県荒尾市宮内日岳九八二 中島康充 発行(五〇円切手四枚、六枚)

# 帝力我において何かあらん

――雑多な報告――

## 市川白弦

シナ晋代の史書『帝王世紀』に擊壤歌（げきじょうのうた）というのがある。堯（ぎょう）の世に一老人が、大地をたたいてうたった歌である。

日出でて はたらき

（日出而作）

日入りて やすむ

（日入而息）

井をうがちて 飲み

（鑿井而飲）

田を耕やして 食らう

（耕田而食）

帝力我において 何かあらん

（帝力于我何有哉）

このうたについてはいろいろの説があり、擊壤は壤という楽器をうつことだともいわれ、古詩として昔からひろくうたわれてきたが、古代の作ではなくて、もっと後代のものだともいわれる。これはアナキズムの傾向をもつ『列子』（れっし）にもみえる歌である。

作者が何を言おうとしたのか、確かではないが、われ

われはこの歌を、非暴力アナキズムの原点として、読み換えることによって、古代人の心が、新しい人間の世紀を予示するものとして、よみがえってくるか、ともおもわれる。

謀略と侵略と汚染の日本にくらべて、なんと健康、なんとという新鮮。われわれの世紀は、まさしく末世（まっせ）である。

われわれはノーベル平和賞受賞者佐藤栄作とともに、落ちるところまで落ちたのだから、「五大切・十反省」の列島改造居士をさそって、奈落からよじ上るほかに、道はのこされていない。

○ 江戸時代の臨濟禅僧沓庵（一五七三—一六四五）の禅思想研究のため、アメリカの国費留学生として、東大・大学院にきていたデニス・リシユカさんが、京都の拙宅をたずねてきた。雑談のあと、詩人アレン・ギンズバークの近況をたずねたところ、最近は会っていないが、きけばあの赤狩りのマッカーシーの命日に、かれの墓場のうえて歌いかつ踊り、「これでやっこさんも成仏できるだろう」と言ったという。

ギンズバークは、詩集『咆哮』（一九五六年）の詩篇

「アメリカ」において、「アメリカよ、なんじの原爆をもつて、汝じしんをフアック（凌辱、強姦）せよ」とうたつて、州議会の問題となり、発禁になったことがある。

数年まえの八月、この非暴力直接行動者を、拙宅へつれてきて、「ビート族のキャップテン」と紹介したのは、大徳寺に参禅中の非暴力直接行動者、詩人スナイダーである。詩集のほか、小論文「仏教アナキズム」がある。アメリカのピキニ水爆実験に抗議して、単身ヨットでもって危険水域に入り、海上ケイサツにたい捕され、ブタ箱入りした経歴のもち主。今はアメリカの森のなかでくらししているという。

○

リシエカ氏と話して、かれがヴィクトリア。良潤さん、「外人であり、禅坊主であり……」（三一書房）の著者と親友であることを知った。いまはヴィクトリア・大禅（三十五才）といい、十余年の参禅歴をもつ曹洞宗の雲水。アナキスト内山愚童の研究家。ベ平連に参加し、国際反戦デモに加わり、托鉢した喜捨をもつて、南ベトナムの戦災孤児を見舞い、朴政権とたたかう宗教者に合流しようとして、たい捕されたりして、「出入国管理令」違反により、昨年六月国外追放となった。いまは

ロサンゼルスで、仏教者のドクター論文をまとめながら、拙著『日本フアンズム下の宗教』（エヌエス出版会）のホンヤクを手がけている。

この一月、手紙にそえて、「ロサンゼルス・タイムズ」にのつた、かれの天皇訪米反対運動のかなりくわしい記事と、天皇あての長文アピールなどを送ってきた。べつの新聞は、かれと真言宗米人僧侶とが、訪米反対の横幕の前で、雲水姿の断食坐禅の写真と記事と、近くの歓迎式場での天皇夫妻の写真をかかっていた。

明朗な非暴力反戦活動者であり、追放まえに拙宅をおとずれたこの雲水さんは私に言った。

「もしも来世、生まれかわることがあると仮定したら、私は植物になりたい。植物になってベトナムの衆生に奉仕したい」と。

かれが持っていた墨染めの袈裟（けさ）は、かれ自身が仕立てたものである。

アメリカには、かれのような非暴力反戦禅が、ささやかに息づいている。だがまた一方、欧米には右翼の大物、笹川良一の支援をうけた反共禅が、急速にひろがっている。

○

「たとえば剣を長空に揮うが如し、反と不反とを論ぜず」という禅語がある。これを、「責任の倫理」にたいする「心情の倫理」の言葉として、読み換えるならば、どういうことになるのか。問題は心情の「純粹」にある。

自分にとってやむにやまれぬと直感したならば、直接行動に出て、効果の如何は考えない、いや、逆効果をまねいたとしても、自分の知ったことではない。人生意氣に感ず、ということになる。

私は数年まえの学園闘争を思い出した。あのころの闘士たちは今どこへ行ったのか。東大安田講堂と日大バリエードの攻防戦は、この国にどのようなプラスをもたらしたのか。安田講堂の前はきれいな芝生となり、学生た

ちはアツケラカンとして通学している、という記事を読んだ。日本の学園と教育界はどのように改革されたのか。闘った精鋭集団が、リュウインを下げただけではなからうか。

ただ記憶に残るのは、「止めてくれるなおっかさん、背中の中のイチョウが泣いている」というポスターと、三島由紀夫が全共闘に招かれて熱弁をふるったこと、三島の死後、かれの死をいたむ垂れ幕が、安田講堂にかげられた、ということである。



# 我ら之が為はよく

幸徳秋水述、帝国主義、愛国心について  
しのびもりの

： 匪徒の乱、太清より天津に至るの道路險悪にして我軍甚だ艱む。一兵卒泣いて曰く。我皇上の為にあらずんば、此艱苦に堪えんよりほむしろ死するに如かずと。聞く者涙を墜さざるはなし。我ら之が為に泣く。  
： 可憐の兵士、我は陛下が皇上の為と言ふ正義の為に、人道の為に、同胞国民の為にと

私が幸徳秋水の「帝国主義」を愛読書とよぶのは次の一節の為である。

「八帝国主義 第二章 愛国心を論ず 其六V・・・」

と言はざるを責めざるべし。彼は平生其の家庭に学校に兵營に於て、彼の一身が唯皇上に捧ぐべきことを教訓せられ、命令せられて、其の他を知らざれば也。

スバルタの奴隷へ「ヘロット」は自由あるを知らず、其主の爲めに駆使され鞭撻され、而して戦に赴て死す。戦に死せずんば即ち其主に殺戮さる。自ら誇りて以爲らく國家の爲也と。我は史を読んで常に彼等の爲に泣けり。今此の心を以て、我兵士の爲に泣く。」

日頃、漢文調になれていなくて意味が充分にとれない現代っ子でも、一読して気魂のこもった幸徳のおもいが、脈うつようなりズムとなつて伝わるのを感じるだろう。念のため口語にかきかえると――

『義和團事件（一九〇〇年）出兵の時、太清から天津に至る道路が、非常に悪かったので我軍は行きなやんでいた。その折、一兵卒が「天皇のために自分はこの苦勞に耐えているが、そうでなければこんな辛い思いをするより、死んだ方がましだ。」と言つて泣いた。これを聞

いて涙を落さぬものはなかったという。私もまた、この兵卒の爲に泣かずにはいられない。

あわれな兵士、私は彼が天皇の爲と言つて、正義の爲、人道の爲、同胞国民の爲にこの苦勞をしのぶのだと言わない事を、責めたりはしない。彼は常日頃、その家庭や学校や兵營の中で、一朝事ある時は、彼の一身は唯天皇に捧げねばならないと教えられ、命令されており、その外の生き方を知らないのであるから。スバルタのヘロットは、人間と生れたからには自由と権利と幸福を持てるものだとは知らず、その主人の爲にこき使われ、ムチうたれ、そして戦に出されて死ぬ。戦で生き残れば主人に殺されねばならない。それでも自ら誇つて言つたという。「國家の爲につくした」と。

私は歴史を読んで、常に彼等の哀れさに泣いた。今、この時と同じ心で、亦わが軍の兵士の爲に泣くのである。秋水はこのような愛国心（パトリオチズム）について、『彼は野獸的天性也、迷信也、狂信也、虚誇也、好戰の心也。』と断言し、愛国心というものがいかに空しい虚妄であるかを歴史にてらして説明する。以下に愛国心を論ず、其三Vについてその大意を紹介しよう。

「党派あることなし、唯だ国家あるのみ、とは古ローマの詩人の言葉だが、実は国家あるが故に非ずして敵国敵人ありし為のみ」である。当時は多数の貧困な農夫が、少数の金持と共に、または金持の従者となって戦場に出て行った。農民たちは兵士として勇敢に戦い、その忠義なことは全く見る者聞く者を感動させずにはおかないものだった。彼等の多くは、どこかの戦場で殺されたことだろう。もし幸いにして戦に勝ち、無事郷里に還ったとしても、その時は奴隷の境遇に落ちる時であった。なぜなら、王侯や金持の耕地は主人の出征中でも、家来や奴僕に耕作させる事ができたが、貧農の田畑は人手がなく荒廃に委せるより仕方がなかったので、留守中に債務を背負うことになり、折角生還しても、本人が土地と共に身売りをして、決済するより方法がなかった。富者は戦争をすれば益々金持になり、そのかゝえた家来も奴隷も多くなるが、貧者には何のもうけもない。貧者は、国家の為に戦ったと言うだけであった。彼等は奴隷の境涯に沈淪しながら、なお、敵を討伐したという過去の虚栄を追想して、甘心し満足しむしろ誇った。

彼等はローマの敵国敵人というものを憎悪した。しかし、敵人が彼等に向ってどんな禍害をもたらしたであら

うか。それは同胞であるはずの金持連が、彼等に対してする仕打ち以上には出ないだろう。彼等は敵人の為めに自由・財産を奪われ、奴隷とされるかもしれない。だが彼等は現に、その同胞のために、すでにそれらの不幸に落されてしまっているのではないか。

また、古ギリシャの所謂ヘロットという奴隷は、事が起きれば兵士であったが、平穏な時は奴隷であった。ヘロットは身体が強すぎたり、人口の増加度がすぎると、主人に殺されることになっていた。そのヘロットが戦場に出て、主人の為に戦う段になると、他に比べるものもないほど勇敢であった。しかも唯の一度も自己の自由のために戦おうとした事はなかった。彼等もまた、外国人を敵として憎み、討伐する事を無上の名譽・光栄と信じていたからである。

彼等がそんな状態に甘んじていたのは何故か。彼等が敵人を憎悪することの激しさを、怪しむことはない。原始以来、人間の愛憎両念は常に繩のようによじれ合い、鏡のように連っているものだ。野獸を見てみると、彼等は常にそねみ合い同類相喰むものであるが、それが見知らぬ異種に逢えば、恐怖のあまり攻撃に出て、今まで相喰むこともあった同類は、かえって団結して新しい敵と

抗争する。彼等の団結、親睦、同情はたゞ敵を同じくしたために生じたもので、敵人に対する憎悪の反動でしかなかったことを知らねばならない。もし、これが愛国心というものなら、それは外国、外人の討伐を以て榮譽とする好戦の心でしかない。好戦の心は即ち動物的天性で、この動物的天性こそ好戦的愛国心なのである。

しかも、悲しい哉、世界人民はなおこの動物的天性の競争場裡に十九世紀を過し、更に依然とした有様で二十世紀をむかえた。

社会が適者生存の法則に従って、ようやく進化発達し、国々の境界や交通の範囲も拡大してくると、公共の敵であった異種族異部落というものはなくなつて、彼等の憎悪の目的もまた失われてしまった。つまり親睦結合する理由もなくなつたわけである。

そこで彼等が一国・一社会・一部落を愛する心は、ただ一身・一家・一党を愛する心と變つてしまふ。そしてこの心を、愛国心と云い又名誉の行いと称するのである。

あゝ、欧米十九世紀の文明よ。一面には激烈な自由競争が、人心をますます冷酷無情にしてしまい、一面には高尚正義なる理想と信仰は全く消えうせている。そうして姑息な政治家や功名を好む冒険家、奇利を求めめる資

本家は、これを見て絶叫するのである。

「四境の外を見よ、大敵は迫れり、国民は其個人間の争闘を止めて、国家の為に結合せざる可らず」

彼等は個人間における憎悪を、外敵に転向せしめて、各自の都合のいいように利用しようとするのだ。もしこの声に応じない者があると責めて言う。

「非愛国者也」と、「国賊也」と。∴

私は三十数年前に、弟や数人の従兄弟を戦地に送つた。その時、彼等にせめて耳うちでもして、必ず生きて帰つてこいと言つてやりたかつたという思いが、年と共に深まる。あまりおそすぎたが、この頃ようやく、人は国の為になど死ぬことはないのだと、大声で言えるようになった。そして、秋水という偉大な人は七十年前に、こんな切々と人戦争などという野蛮な事は止めよと、言葉をつくして警告していたのにと、彼の名文に引ずられながら涙をこぼす。

そして一九〇一年（明治三四年）という秋水のこの論文発表時の日本の政治的経済的社會がどのようなものであったかを思う時、その雄渾果敢な筆力にこめられたものをみのがすわけにいけないのである。